

刊行概要

1 判型（平成 29 年第 1 回港区史編さん委員会で決定）

原始・古代・中世～現代編	A 5 判
資料編	A 4 判（平成 30 年度第 2 回港区史編さん委員会で決定）
自然編	A 4 判
図説版	A 4 判

2 装丁

ソフトカバー、函なし

3 発行部数

原始・古代・中世～現代編	}	1,000 部	【内訳】寄贈：700 部 販売：300 部
資料編			
自然編			
図説版	1,800 部	【内訳】寄贈：1,300 部 販売：500 部	

4 組体裁

原始・古代・中世～現代編	縦書き	モノクロ	（口絵はカラー）	1 段
資料編	縦書き	モノクロ	（口絵はカラー）	
			※段組は検討中	
自然編	横書き	カラー		2 段
図説版	横書き	カラー		2 段（英語併記）

（平成 30 年度第 2 回港区史編さん委員会で決定）

5 字数

原始・古代・中世～現代編	A 5	1 段組	約 960 字を想定	（13Q 9.2p）
			※コラム及び引用文（短文を除く）は	12Q（8.5p）
自然編	A 4	2 段組	約 1,600 字を想定	（14Q 9.9p）
			※コラム及び引用文（短文を除く）は	13Q（9.2p）

（別紙見本参照）（※資料編・図説版については別途検討）

6 刊行年月（予定）

原始・古代・中世編	令和 2（2020）年 10 月
近世編（2 巻）	令和 2（2020）年 10 月
近代編（2 巻）	令和 4（2022）年 3 月
現代編（3 巻）	令和 5（2023）年 3 月
資料編（2 巻）	令和 5（2023）年 3 月
自然編	令和 2（2020）年 10 月
図説版	令和 2（2020）年 10 月

7 執筆要項（自然編、原始・古代・中世～現代編、図説版）

※資料編は図版等が多用されるため、別途作成予定

（1）構成

（各巻共通）

- ・刊行のことば
- ・目次
- ・章・節・項（構成は平成29年度第1回港区史編さん委員会で決定）

※別紙参照

- ・参考文献、引用文献
- ・執筆者略歴
- ・索引
- ・凡例
- ・港区平和都市宣言
- ・奥付

- ① 文の構成は、章、節、項、見出し、4種類とします。また本文とは別にコラムを配置します。一つの節または項が長くなる場合は見出しを設置し、読みやすい長さに区切ります。（図説版は章・節までとし、時代ごとに、概説、各節トピック、コラムでの構成となります。）
- ② コラムは、区民が区史に親しみが持てるよう、各編において設置しますが、各編・章の中でのバランスを踏まえた上で、同じ節の中に配置するコラムは4つ以内を目安とします。
字数は、1～4ページ（見開き2ページ以内）、1ページあたり800字程度とし、それを超える場合は、見出しや項としての配置を検討します。
囲み枠等、本編と異なる体裁とし、必要に応じて写真等の図版を入れます。
取り扱うテーマの規模によらず区史全体を通してコラムは一種類とし、適当と思われる場所に配置します
- ③ 本文、コラムとも、文体は「だ・である」体とします。
- ④ 体言止めはできるだけ使用しないでください。
- ⑤ 段落冒頭部分は1字下げとします。
- ⑥ 本文を補足し記述内容をわかりやすくするため、適宜、図・表・グラフ・写真を使用してください。
- ⑦ 敬語・敬称は必要最小限とします。

（2）書式

①用字用語

- ・代名詞、連体詞、接続詞、助詞、助動詞、形式名称などは原則、ひらがな表記とします。
- ・外来語、外国人名・地名についてはカタカナで表記します。

②約物

- ・和文中の句読点は全角の「。」、「、」を使用、丸括弧は、全角の（）を使用します。

・部分的注釈のあとは句点を付けます。

例) 今月の消費者物価指数上昇率は0.5パーセント(速報値)。

・文章全体の注釈、筆者名、クレジットなどは()の前に句点を付けます。

例) 史料の全文は次の通り。(原文のまま)

③欧文

・欧文中の句読点は半角の「,」「.」を使用し、丸括弧は、半角の()を使用します。

・英語などの欧文単語は、語頭は半角大文字、その他は半角小文字を使用します。

※略語等、大文字表記が通例となっている場合は除く。

・略語は、初出部分では「日本語の正式名称(略語)」を表記し、再出以降は略語のみを記述します。

・国名、地名、組織名、外来語はカタカナ表記を基本とします。漢字表記が慣例となっているものはその限りではありません。

・外国人名も原則としてカタカナで表記します。初出部分ではフルネーム(欧文のフルネーム)表記とします。再出以降はフルネームでなくても構いませんが、読者に配慮し、通例となっている呼び名を優先します。

④数字

・本文中の数字は、原則として縦書きの場合は漢数字、横書きの場合は半角算用数字とし、新聞による数字表記を基準とします。横書きの場合は、数量や順序などを示す場合は原則として算用数字、慣用句などは漢数字を用います。見出しも本文と同様とします。

例)【表記例 横書きの場合】

10月25日午後11時40分ごろ、港区役所9階、42.195km、125億4,500万円、7,000人(万以上からは単位語を付ける)等

※横書きから刊本縦書きへの変換は編集段階で行います。また、Webへの掲載は横書きとなります。

例)【表記例 縦書きの場合】

一〇月二五日午後二時四〇分頃
港区役所九階
四二・一九五キロメートル
一二五億四五〇〇万円
七〇〇人(七百人としない)
九八七〇人(九千八百七十人としない)
一〇〇〇個 一〇〇〇本
五万一〇〇〇人
富士山の標高は三七七六メートル
一三四・五メートル
分数は「四分の三」「二〇分の二」のように表記する。
数字の範囲を表す場合は「く」を使う。
二万く三万円 二〇〇六年く二〇〇七年三月

・年号は、原則元号を用い、その後に（）にて西暦を記載します。

例）安政5年（1858）

・本文中において図表などの参照指示を行う場合は、半角算用数字とします。

⑤人名

・人名の後に全角（）を用いて、（生年～没年）を記載します。

⑥専門用語

・専門用語はできるだけ使わず、平易な日本語による記述を心がけてください。

⑦ルビ

常用外漢字、難読漢字はできるだけ避け、やむを得ず使用する場合は初出単語にルビをふってください。

（3）執筆上の注意点

①より分かり易くするため、義務教育修了程度の者が理解できる水準の内容と文体となるよう配慮してください。

②一文は読みやすい長さで区切ってください。

③一貫性のある用字用語・仮名遣いを行ってください。

④見出し、文章、キャプション、ルビ等については、読みやすさや統一性などを考慮し調整することがあります。

（4）資料引用の表記

①漢字

・漢字は原則として「常用漢字」の新字体を使用してください。

・常用漢字表にないものは正字に改めてください。

・固有名詞（地名・人名など）や特に必要と認めるものは原文のままとします。

②変体仮名

・変体仮名は原則として現代仮名に改めます。ただし、江（＝え）・而（＝て）・与（＝と）・者（＝は）・茂（＝も）はそのまま小字として用います。

③返り点

・引用文中などにおける漢文のレ点や一・二点などの返り点については、文字フォントを上付きにします。

例）日一天無^レ雲、風静ニシテ如^レ春

（5）図版（図・表・グラフ・写真）

①図・表・グラフでは、半角算用数字を使用します。

②内容を説明するキャプションは、刊本では100文字程度とします。

※Webには全文掲載が可能となります。

③画像データは、原則として「TIFF」もしくは「JPEG」で解像度を高めにして保存することとし、この保存が困難な場合は「PDF」で保存します。

④写真を使用する際には、撮影者の著作権はもちろん被写体の肖像権にも配慮してください。

⑤写真には、タイトル、出典・所蔵を記載します。必要に応じてキャプション（説明）を記載します。

(6) 引用・転載

- ①引用・転載する場合、本文中の記載については、必要最小限の史料情報のみをとります。
- ②引用は原則として、原文のまま転載します。誤字、当て字、脱字などがあってもそのまま転載し、その個所に「ママ」とルビをふってください。
- ③引用・転載文は、短文の場合は「」を付けて記載します。
- ④図版等については、区から刊本およびWebへの掲載等許可申請を行います。
図版等は各執筆者が許可の内諾を得ておくとともに、所蔵者名及び所蔵者の連絡先を添えて、準備してください。許諾が得られたものののみ、刊本またはWebに掲載いたします。

(7) 参考文献

- ①本書巻末または章末に参考文献のページを設け、書名（文献名）、著編者名、出版社名、刊行年を記載します。
- ②書名や論文集などの刊行物のタイトルは『』でくくり、論文などのタイトルは「」でくくります。

(8) 禁止事項

- ・文字装飾、傍点、太字、斜体、下線、打ち消し線、機種依存文字・環境依存文字、km、㍓など全角で示す単位記号、(15)、(丸)などの括弧つきの数字や文字、(株)、No.、Telなどの略語、半角カタカナ文字は使用しないでください。
- ・史資料や歴史用語に使われている差別的表現については、監修段階において、監修者が区と協議の上、掲載の可否を決定します。また、史資料および本文はWEBで公開されるため、一般の方の目にとまりやすいことをご理解いただき、不用意に差別を助長する表現とならないよう慎重に配慮願います。